PUNISH!

～相○士補の受難～

強姦セックス

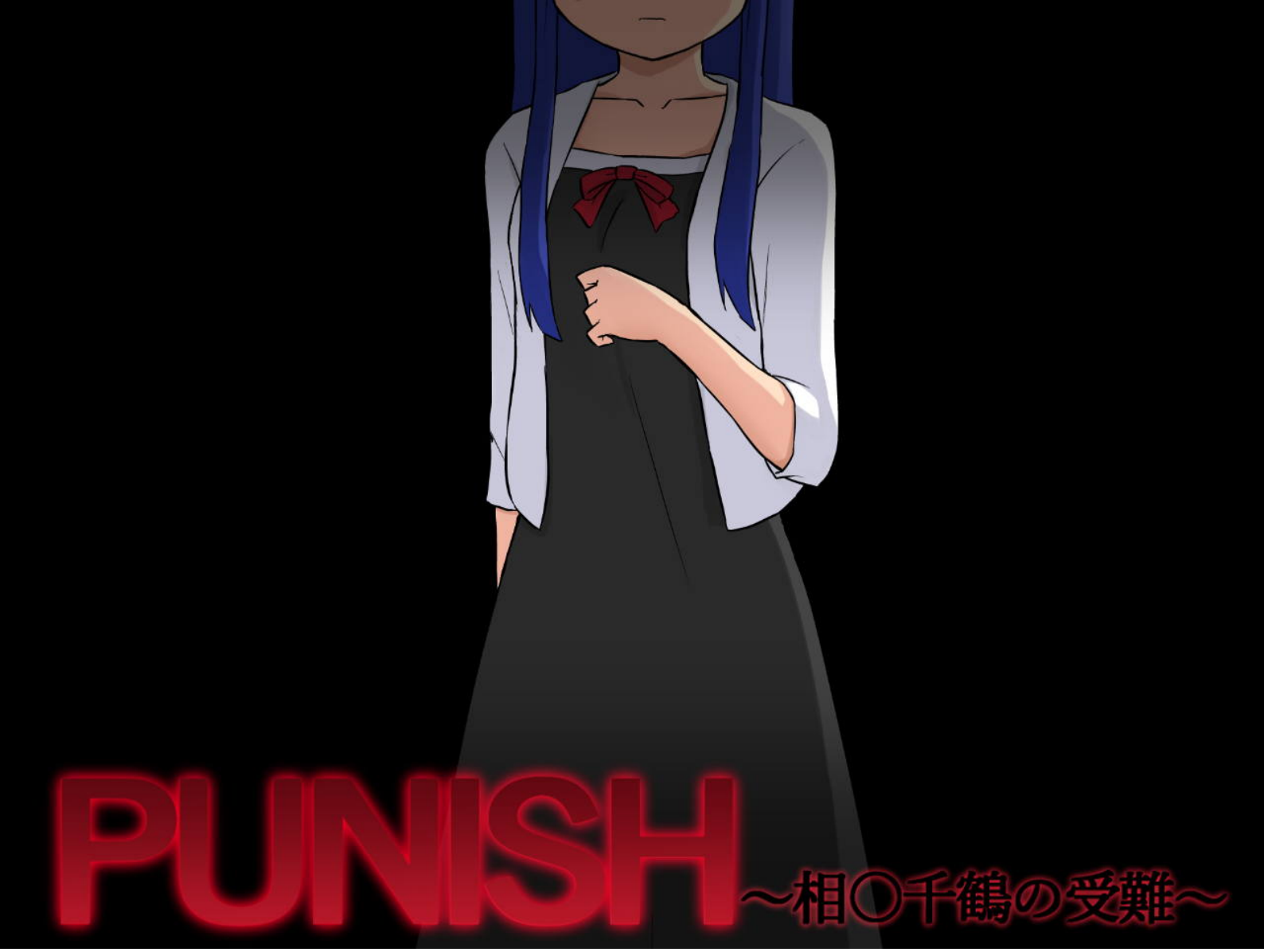
バイブ責め

イラマチオ

アナルファック

輪姦・・等々

基本CG14枚＋差分＋α計71枚＋文字なしver


PUNISH
～相○千鶴の受難～

「エビチャーハンとミートスパゲッティお待ちどうさま！」
私の名前は『千鶴』。相沢家の長女で、両親が不在の中
夏の間はこうして海の家で経営者 兼 厨房担当として
妹たちと一緒に働いている。
いつもと変わらない日常・・・
両親がいないながらも家族４人で過ごす毎日は
とても賑やかで楽しいし、
お店の常連客もみんな良い人ばかり。
私はそんなみんなとの日常が大好き。
この日常がずっと続けばいいのに・・・
心からそう思う。
だけど私はそんなみんなに『隠し事』をしている。
決して誰にも明かすことができない『隠し事』を・・・
海の家
れもん

昼食時のピークが過ぎ客足も落ち着いてきた頃・・・
『ブーン』
突然私の携帯にメールが送信されてきた。
いったい誰からだろう？
そう思いメールの差出人の名前を見てみると私は一気に表情を曇らせた。
『あの男』からだ。

「姉貴？どうしたんだ。具合でも悪いのか？」
私の異変に気付いて妹が声をかけてくれた。
「い、いえ・・・今日の夕ご飯何にしようか考えてたのよ！」
私はすぐさま笑顔を作り、そう切り返した。
ごめんなさい・・・本当のことは言えないの・・・・・・

みんなに隠れてさっきのメールを確認してみる。
メールの本文にはこう書かれていた・・・

【今夜9時に○○ビルの前で待ち合わせしよう。
もし来なかったらどうなるか分かってるよね？】

私はまた、この幸せな日常から引き剥がされることになる・・・

夜9時〇〇ビルの前…
私は指定された時間の10分ほど前からずっとここで待っている。
『あの男』はまだ来ていない。
むしろ『あの男』が時間通りに来たことは今までほとんどなかった。
今日もたぶん何分か遅れてくるだろう。
『これから私は何をされるのか…』
それを想像するだけで胸が酷く軋む感じがした。
もういっそのこの事このまま消えてしまいたい…

指定時間から数分遅れて『あの男』が来た。仲間を連れて・・・
『やあ！お待たせ～千鶴ちゃん❤逃げずによく来たね～』
軽い口調で私に話しかけてきた金髪の男・・『桐島 幸輔』
この連中のリーダー的存在であり私をメールで呼び出した張本人。
ある理由があって私はこの男には逆らえない。
全ての元凶・・・

今まで私は何度も呼び出されては男たちにセックスを強要させられた。
そして今日も・・・。
私に拒否権はない。

私は声を震わせながらもなんとか言葉を絞り出す。
『・・・いつまでこんなことを続けるの？』
『さあね～、それは千鶴ちゃん次第かな？』
『そのためにも、もっとオレたちを楽しませてくれなきゃ♪』

「ははは！どうしたのさ～、そんな暗い顔して？」「オレたちと会えて嬉しいだろ？ほら笑えよ！」
「・・・嬉しいわけ・・・ないでしょう・・・・・もうイヤよ、こんなこと・・・」
小さな反抗。だけど膝はガクガク震えていた。
「あれぇ、もしかして怒ってるの？千鶴ちゃん」
「千鶴ちゃんが本気だしたらオレらなんかワンパンでやられちまうしな～怖い怖い♪」
私が逆らえないことを分かってて好き放題言う。
「別にいいんだぜ？イヤなら帰っても。ただそうするとあんたも・・あんたの家族も人生お終いになっちまうがな！」
「・・・・・・!?」

私だけならまだしも家族にまで手を出させるなんて、それだけは絶対に避けなくてはならない。
「・・・お願い・・・・・・家族には何もしないで！」
「だったら自分がどうすればいいか・・・分かるよね？」
私は不本意ながらも小さく頷いた。そうするしかなかった。
「それじゃあ、いつまでもこんなとこいないで早くラブホ行こうぜ！」
「そうだな、じゃあ行くか！」「今日もビデオカメラ持ってきたから千鶴ちゃんのヤラしい姿いっぱい撮ってやるよ！はははっ！」
そんな・・・
私は涙を飲みながら男たちとラブホテルへ向かった。

某所のラブホテルの一室・・・シャワーを浴び終えた私は
バスタオル一枚の姿で男たちに囲まれている。
「それじゃあ撮影の準備もバッチリだしバスタオルを取ってもらえるかな？」
「うっ・・・」
こんな男たちの前で、しかもビデオカメラで撮られながら裸になるなんて・・・
躊躇う私に痺れを切らして男の一人が怒鳴りつける。

「いいから早く裸になれよ！もう何回もオレたちに裸
見られてんだから何も変わりゃしねーだろ！」
私はビクッと体を震わせ怯んだ。
「あーあ、千鶴ちゃんがその気にならないんだったら
オレたち千鶴ちゃん家に行ってイタズラしちゃおっかな～」
「や、やめて！それだけは・・・お願い・・・」
「だったら早くしろ！」
私はただ、男たちの言いなりになるしかなかった。

私はゆっくりバスタオルを取り、男たちに自分の裸を晒した。
「この形のいいオッパイとピンクの乳首・・最高だな！」
「早くヤリてー！」
胸、乳首、お尻、アソコ・・男たちに舐め回すように体の隅々まで見られ、
ビデオカメラで撮られている。
…!?
ザキ
ザキ・・
「うぅ・・・」
恥ずかしさのあまり泣いてしまいそう。
「千鶴ちゃんはドMだからカメラで自分の裸を
撮ってもらって嬉しいでしょ？良かったね♪」
「そうかー、千鶴ちゃんはドMだったのかー！」
「はははは！」
男たちに晒し者にされ笑い者れる。もう・・イヤ・・・

一人の男が背後からいきなり私の胸を鷲掴みにする。
「きゃっ!?」
完全に不意を突かれて思わず声を上げてしまった。
「やっぱり千鶴ちゃんのオッパイは良い揉み心地だな！」
「はあ・・・はあ・・・んっ・・・・・イ・・イヤ・・・・あ・・・」
無遠慮に・・・そして乱暴に私の胸は揉まれる。
あ？・・・
ハア
ハア？
あんっ・・・
「あっ・・・あん・・・い・・痛い・・・・はあ・・はあ」
「痛いとか言いつつ感じてんじゃねーのか？あ？」
「んっ・・ち・・違う・・・はあ・・はあ・・そんなことない・・・」

私が胸を揉まれている最中にもう一人の男が私のアソコを指で撫でる。
「ああっ…んっ…あ…はあ…はあ」
「おい！こいつ、マンコめちゃくちゃ濡らしてるぞ！」
「ははははっ!!こんな乱暴に揉まれてマンコ濡らしてるなんて、やっぱり千鶴ちゃんドMじゃん！」

「くっ…」
悔しさが込み上げてきたけど事実、アソコから流れた愛液が内腿を伝ってきているのが分かった。
「ほらほら！気持ちいいんだろ？なあ！」
「ああっ…はあはあ…あっ…あっ…んんっ……はあ…はあ」
クリトリスを刺激され、体は更に敏感に反応する。

暫くして男たちは手を止めた。
『はあ・・・はあ・・・はあ・・・』
男たちに嬲られた体は火照って赤みを帯び、
息も荒くなっている。

「これからたっぷり可愛がってあげるから楽しみにしててね♪」
男はそう言いながらイヤらしい笑みを浮かべた。
ああ・・・またこの男たちに自分の体を捧げなくちゃいけないなんて・・・

男は私の顎を強引に持ち上げ顔をまじまじと眺める。
恐い・・・
この男・・・一体何を考えているの？
クイッ
「実は今日、千鶴ちゃんに良いものを持って来たんだ！」
「良いもの・・・？」
「そう！これこれ！」
男がズボンのポケットから取り出したもの・・・錠剤？
「これは海外から取り寄せた媚薬でね・・・
強力すぎて日本じゃ売られてないんだ！」
媚薬!?イヤ・・・そんなの飲みたくない・・・

「はい、飲ませてあげるから口を開けて！」
私は唇を震わせながら口を開け、そこへ媚薬を押し込まれた。
ハア
ハア…
「本当は2錠で充分なんだけど今日は
特別に4錠飲ませてあげる♪」
そんな…
「ほら！早く飲み込んで！」
男は強い口調で私を促せる。

「んっ・・・く・・」
私はひと思いに媚薬を飲み込んだ。
舌には少しピリピリとした苦味が残っている。
私の体は一体これからどうなってしまうのだろう・・・

「っはあ・・・はあ・・・・」
「よ～し、良い子良い子♪即効性のある媚薬とはいえ
効き目が出るのにしばらくかかる・・・
だが一度この媚薬の効果を味わったら病みつきになるだろうね！」
ハア
ハア・・・
「そんなの・・イヤ・・・」
さらに深みに堕とされたような・・・そんな感覚。
私はこのまま男たちの欲求を満たす道具に
されてしまうの？

「楽しい夜にしようぜ？なあ！」
ガシッ！
「!?」
唐突に頬を掴まれ、次の瞬間唇を奪われた。
「あむ・・・ちゅっ・・・んん・・あっ・・・・・・ちゅく・・・・・・」
強引に唇を抉じ開けられ絡ませられる舌と舌。
男の唾液が私の口内へと流し込まれる。
あっ・・・
ハァ
ハァ・・・
ちゅっ
ちゅぷ
れろ
んっ・・・
「ん・・んんっ・・・・ちゅぷ・・むぅ・・・あ・・・」
このまま無理矢理にでも引き離したいけど
それはできない。
そうすると男の怒りを買いかねないから。
私はただ受け入れるしかなかった・・・

「はあ・・はあ・・・・はあ・・・・・はあ・・」
ようやく解放された私の唇は少し震えていた。
好きでもない男にムリヤリ唇を奪われる悔しさと恥辱感・・・
私の心はいとも簡単に踏みにじられる。
ハア・・・
ハア
ハア・・・
「よし！もうお前らの好きにしていいぞ！
そろそろ媚薬が効いてくる頃だろうからたっぷり可愛がってやれ！」
「はっはー！待ってたぜ！」
「メチャクチャに犯してやるよ！肉便器ちゃん♪」

「さあ来い！」
「きゃあ!?」
乱暴にベッドに放り込まれ小さな悲鳴を上げた。
媚薬が効いてきたのか、体は汗ばみ息も荒い。
乳首とアソコにジンジンと言いようのない刺激を感じる。
私の体がおかしい……
アソコがもう既に濡れている。
ハア…
ハア…

男は私の背後に回り、胸を揉みしだく。
媚薬に侵された私の体はいつもより過敏に反応している。
「んっ…はあ…はあ…あ…あっ……あん……」
「ああ？感じてんのか？お前の恥ずかしい姿を撮ってやってんだからもっと鳴けよ！ほら！」
「くっ…イ。イヤぁ…あっ…あんっ」

「おい！オレにも揉ませろよ！」
「けっ！しゃーねーなぁ・・・こっちのオッパイはお前にやるよ！」
「へへっ！」
もう一人の男も加わり私の胸を揉みながら乳首と乳輪を舐め回す。
あっ！
ん・・・
ハァ・・・
ビク
ハァ
ビクッ
あん・・・
「どうだ！気持ちいいか？
気持ちいいって言えよ！なあ！」
「んっ・・・気持ちよくなんて・・・ない・・あぁっ!!」
私の心は必死に耐える・・・快楽に支配されないように。

「きゃっ!?い・・痛い・・・・」
男が私の乳首を噛む。しかもかなり強く。
「あぁぁぁぁ・・・ぁぁっ・・・・あっ・・・・痛っ・・・い・・・やめて・・・」
歯を左右させスリ潰すようにして乳首を痛めつけられる。
いやぁっ!!
痛っ!!
ビクッ
ギリ
あっ・・・
ギリ
ビクッ
あぁぁ・・・
「いいね～、その声！やっぱり千鶴ちゃんは
良いリアクションしてくれるなぁ！」
「千鶴ちゃんはM女だから痛いの
好きなんだよね♪ははっ！」

「今度はマンコを弄ってやるよ！さあ股を広げろ！」
「う・・・」
私はベッドに寝かせられ男の指示に従う。
ハァ
ハァ
ハァ・・・
トロ・・・
「なんだぁ？もうマンコメチャクチャ濡れてんじゃん！」
「はははは！全くヤラしい女だぜ！」
「くっ・・・・!?」
複数の男たちに自分のアソコを晒しビデオまで撮られて・・・ああ・・・恥ずかしい

「おい！マンコ味見させろよ！」
ぴちゃ・・ぢゅるっ・・・・ちゅぷ・・ぢゅっ・・・
「あぁ・・・あっ・・・んんっ・・」
私のアソコが舐められたり吸われたりするたびにイヤラしい音をたてる。
「クリトリス勃起させて悦んでやがるぜ！」
「マン汁もこんなに溢れ出しちゃって、やっぱり千鶴ちゃんは淫乱なドスケベ女だったんだね♪」
「ち・・違う・・・これは媚薬のせいで・・・あっ!!」
卑猥な言葉で責め立てられ更に羞恥心を煽られる。
ハァ
ハァ・・・
ハァ
んっ・・・
あぁっ・・・
あっ・・・
ビクッ
ビクッ
ピチャ
ちゅぷっ
ぺちゅ

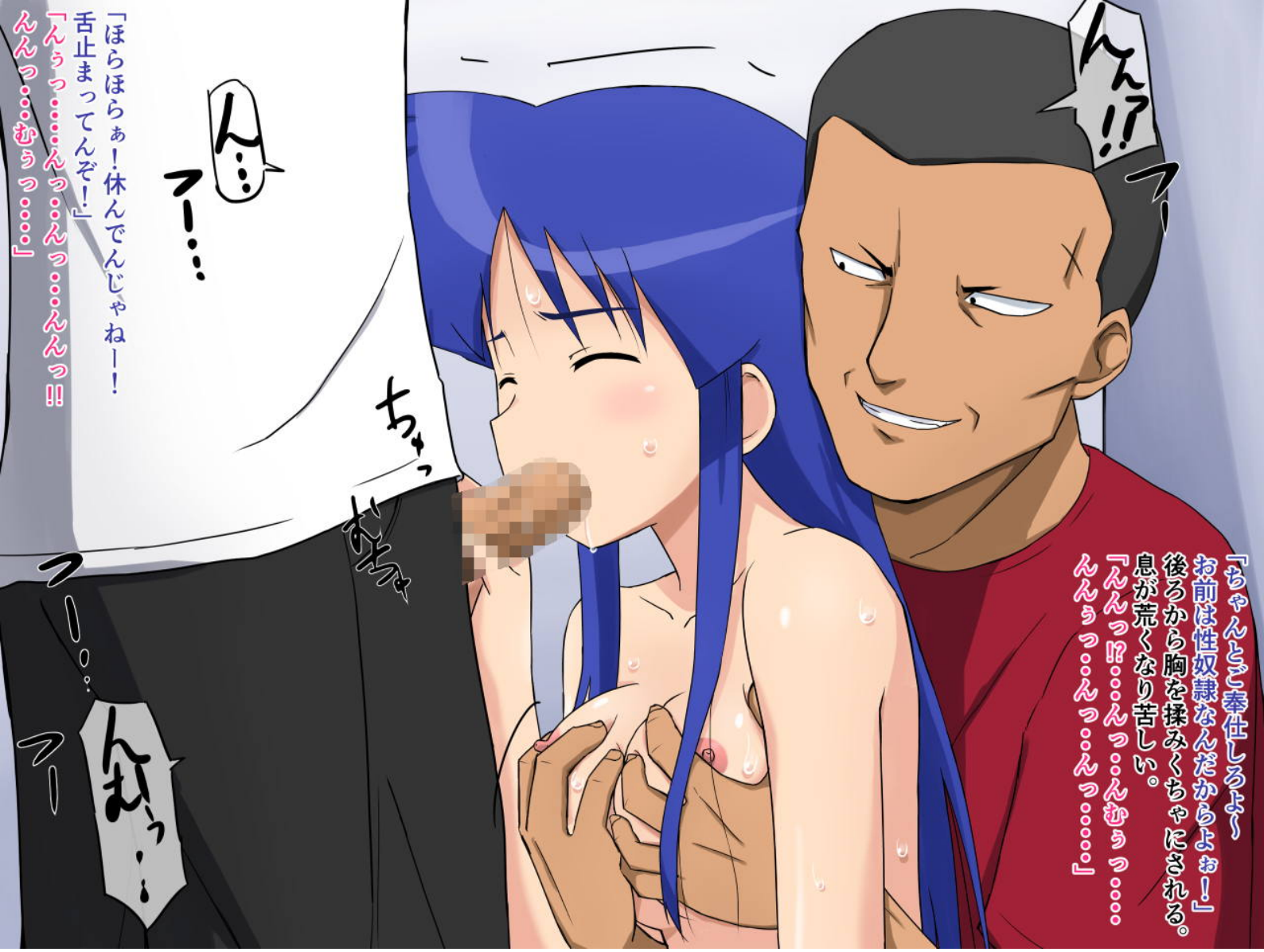
「淫乱でドM・・・まさに性奴隷として最適だな！」
もう一人の男がそう言いながら私の胸を揉む。
「イ・・イヤ・・・はあ・・はあ・・・性奴隷なんて・・あんっ・・・」
「あ？こんなにヨガってるクセに何言ってんだよ！」
ハアあっ・・・
あんっ!!
ハアハア
ビクッ
ハアっ!!
ハア
ビクンッ
ぐちゃ
ちゅぷ
ちゅるっ
男たちの愛撫は更に激しくなる。
「おら！認めちゃえよ！自分が淫乱でドMな性奴隷だってな！」
「あんっ・・・ハア・・ハア・・・違う・・・私は・・そんなんじゃない・・・あああっ・・」

男はバッグから取り出したバイブを
私のアソコに挿入した。
「んんっ・・・!!」
スイッチを入れられた瞬間、私の膣内で
バイブが振動しながらウネウネと蠢く。
「言え!『私はあなたたちの性奴隷です』ってよぉ!」
「い・・いや・・・いやぁ・・・・・ああっ・・・そんなこと
・・・言いたくない・・・あっ・・・あんっ・・・・」

「いやぁああ!!イクッ!!イクッっっっ!!」
繰り返す膣内への刺激に耐えられず
私は絶頂に達してしまった。
「ははははっ!!こいつ潮吹きやがったぜ!!」
「自分でオナニーするよりバイブで責められた
方が気持ち良いんだろ?なあ!!」
「ハア…ハア…ハア…ハア…
ううっ…い…いやぁ…」
こんな醜態を晒してしまった自分が
ただただ情けなかった。
あぁ…
どクンッ
ドクン
あぁ!!

「今度は千鶴ちゃんがオレたちを気持ちよくする番だな！」
「おら！オレのチンポをしゃぶれ！」
「う・・・」
ズボンのチャックを下し目の前に出されるペニス・・・
少しイヤな匂いがする。

私は男のペニスを咥え、頭をゆっくり動かす。
「んっ・・・ん・・・ん・・・んむぅ・・・・・んん・・・」
「もっと舌を使え！そんなんじゃオレのチンポは満足しねーぞ！」
「んん・・んっ・・・・んぅ・・・ちゅむ・・・ハア・・ハア」
舌に広がるペニスの味・・しょっぱくて少し苦い。
んっ・・・
んん！・・
んっ・・・
ちゅっ
ちゅむ
ちゅ


「ちゃんとご奉仕しろよ～
お前は性奴隷なんだからよぉ！」
後ろから胸を揉みくちゃにされる。
息が荒くなり苦しい。
「んんっ!?…んっ…んむぅっ…
んんぅっ…んっ…んっ……」
んっ!!
フー
「ほらほらぁ！休んでんじゃねー！
舌止まってんぞ！」
「んぅっ……んっ…んっ…んんっ!!
んんっ…むぅっ…」
ん…
フー…
ちゅっ
むちゅ
フー…
んむっ…
フー

「オラァ!!もっと奥まで咥え込め!!」
「んんんっ!!……んんっ……んぇえっ……
んっ……んっ……うぶぅ……んんっっっ!!」
ペニスが喉の奥を突き嘔吐いてしまう。
苦しい…早く終わって!
んっ!!
んっ!!
ヴェァ!!
ちゅぱっ
ぎゅぎっ
ぉゴぅ!!
ポタ
ポタ
「はははははっ!!どうだ?苦しいか!?」
「オイっ!!オレの手に涎垂らすんじゃねぇよ!」
男は怒って私の胸をギュッと握りつぶす。
「んんんんっっ!!」

「うおお…出すぞ!!」
「んぶっ…!?」
口の中で精液を出された…。
「オラ!!飲め！零すんじゃねーぞ!!」
「んんっっ!!…ぶふっ…んえっ…んぶっ!!…んんっ!!」
ペニスを咥えたまま嘔吐き、そして咽る。
!?
んぶっ!!
ドクッ
ドクッ
ポタ
ポタッ
んぐっんんっ!!
頭を押さえつけられているためペニスを放すことができず、口の中でどんどん精液が溜まっていく。
「おぶっ…んくっ…んくっ…ぶぇ…んぶぉっ」
いくらか精液を飲んじゃった。吐きそう。

「うぇええっ!!・・・げほっ・・・げほっっ・・・・おぇっ・・
ハア・・・ハア・・・・うぅっ・・けほっ・・・げほっ!!」
ようやく解放された。飲みきれなかった精液を吐き出し
涎と一緒に私の体を濡らす。
「全部飲めっっっただろ!!なに零してんだ!!」
おえっ!
ハア
ハア
ハアハア
ボタ
ボタ
「ハアハア・・ハア・・ハア・・・・うぅっ・・うぇっ・・・ハア・・ハア」
飲んだ大量の精液がお腹の中に溜まって気持ち悪い。
「千鶴ちゃんの苦しそうな表情、最高だったよ♪
ビデオカメラ持ってきてて良かったな!」
「だよな!いかにも肉便器って感じだ!」
この男たちは私が苦しむ姿を見て喜んでいる。
酷い・・・あんまりだ
うっ!!
ゲホッ!!
ゲホッ!!

「上に乗れ！」
「え・・・」
私は指示通り男の上に跨がった。
「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」
心臓の鼓動は高まり息も荒くなる。
今まで何度も男たちに犯されてきたけど、やっぱり怖い・・・
ハア・・・
ハア・・・
ハア
「ほら！自分でマンコの中にチンポ入れんだよ！
当然ゴムなんていらねーよなぁ？」
「そんな・・・!?」
また・・・ゴム無しで・・・・・・!?

自分のアソコを指で広げ、ゆっくりと
ペニスを膣内に挿入する。
『ん……はぁ…』
既にアソコは濡れていたけど男の大きな
ペニスを挿入するにはかなり窮屈だった。

「自分で腰動かしてオレを気持ちよくしてみろ！」
私はゆっくりと腰を動かす。
『んっ…あっ…はっ……はぁっ……あんっ』
ペニスが擦れるたびに自分の意思とは関係なく
喘ぎ声が漏れる。

「オラオラ!!もっと激しく腰振れよ!こんなふうに!」
「あぁん!!・・・あっ!・・・あっ・・・あん!あんっ!!・・・はぁっ・・・あぁっ!!」
男が下から私のアソコを何度も何度も激しく突き上げるたびに私の体は上下に揺らされる。
あぁん!!
あ・あ!
あん!
「あん!・・・あんっ!・・・いやん!・・・あっ!ダメっ!・・・あああっ!」
「ははっ!!見ろよ!オッパイ揺らしながら乱れてるぜ!肉便器がよぉ!」
「あんっ!!・・・ちがっ・・・あっ!・・・そん・・な・・あぁあっ!!」
反論したいけど喘ぎ声に遮られて、まともに言葉がでない・・・
あんっ!
いやぁ!!
パンッ
パンッ
ぢゅぷっ
とぷっ
にゅぷっ

「うおおっ・・・出すぞ!!」
「!?」
えっ・・・出すって・・・もしかして中に!?
「ああっ・・・あんっ!・・・い・・いや・・
あっ・・・いやあぁぁぁあ!!」
ドプッ・・・ドク・・・ドク・・・・ビュクッ・・・
ビクッ
ビクッ
ドプッ!
ドクッ
ドクッ
あっ!
あんっ
いやぁぁぁ!
「ハア・・ハア・・・あ・・・いやぁ・・・・」
「ふぃ~・・・やっぱ中出しは最高だな!」
「ハア・・ハア・・酷い・・・中に出すなんて・・・ハア・・ハア・・・・」
私の目から涙が溢れる。
「なんだよ今更!中出しなんて前から何回もされてんだろうがよ!」
こんな理不尽な仕打ちを受けても男たちの言いなりにならなくちゃいけないなんて・・・

「次はオレの番だね♪後ろから挿れてあげるから四つん這いになって！」
「ハア・・・ハア・・・お願い・・・もう・・これ以上は・・・」
私の体はもう既に2回、深い絶頂に達し疲弊している。
「ははっ!!喧嘩は鬼みたいに強いのにセックスの時は弱々しい只のメスじゃないか！」
ハア・・・
ハア・・・
「でもね～オレも含めてまだ千鶴ちゃんのマンコにチンポ突っ込んでない奴もいるんだからさぁ～仲間外れにしちゃ可哀想だろう？」
「そ・・・そんな・・・・・」
私の気持ちなんてお構いなしに、ただ蹂躙されるだけ・・・

「んんっ・・・はあ・・・あ」
私のアソコにペニスを挿し込まれる。
すごく・・・大きい
「強い女を犯す・・・こんな最高なことないよね♪」
「くっ・・・」
ぬぷっ
ぐちゅっ
ぬちゅっ
はあ
ハァ
あっ
ハァ
あんっ
ハァ
あっ
ハァ・・・
ぐちゅっ・・・ぬぷっ・・・ぬちゅっ
「あっ・・・あんっ・・・はあっ・・・あっ」
ゆっくりと繰り返されるピストン運動。
だけど大きなペニスは私の膣内を酷く圧迫してとても辛い。

「もっと乱れさせてあげるよ♪」
「!?」
私の腕を取り、急に激しいピストン運動に変わる。
「あぁぁっ!!あんっ!!あんっ!あぁんっ!!あんっ!!」
私の体が大きく揺さぶられる。
胸は激しく揺れ、髪は乱れ、汗を吹き散らす。
『あはははは!!まるでメス豚だな!こんな姿を千鶴ちゃんの家族が見たらどう思うだろうねぇ?』
一瞬ドキッと心臓が跳ね上がった。
「あんっ!!あんっ!あぁっ!はぁっ!!いやっ…やめ…て…あぁっ…」
『家族には見せないで!』そう言おうとしたけど喘ぎ声が言葉をかき消してしまう。
ぶちゅっ
ぬちゅっ
パン
パン
あぁ!
あんっ!
あんっ!!
はぁっ!!
あぁっ!!

「ああんっ…イクっ…イクっ…ああ…っっっ!!」
まるで電流が走ったかのように痙攣する体。
「あああっ!!…あっ…あ…」
ああ…またイッてしまった。
だけど、それでもまだピストン運動は止まらない。
「ハア…あっ…んくっ…あ…ちょっ…もう…やめ…
はあっ…はっ…ああっ…やめ…て…あんっ!!」
ぬちゃ
くちゅ
パン
パン
はっ
あ!
あん
あ…
あぁっ…
「ははっ!まだまだ!」
私の願いは聞き入られず腰を振り続けられる。
「あっ…ああっ…お願い…抜い…て…あぁっ…」
脱力しきった体を容赦なく打ち付けられる。
お願い、早く終わって…

「はあっ・・・はっ・・あっ！あっ！ああっ!!・・・」
終わらない苦痛と快楽に私の体はおかしくなりそう。
「ああ・・もうそろそろ出そうだ・・・」
「あっ!!あぁっ!!あん！・・中には・・・ハア・・・出さない・・で・・・」
「ダーメ❤」
!?
ドプッ！
ドクッ
ドクッ
ビクッ
ビクン
ドプっっっっ
「あうっ!!・・・ううううっ・・うう・・・・んんっ」
また中出しされた。
膣内でペニスが脈打ちながら
大量の精子を注ぎ込まれる。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」
長くアソコを突き続けられたため腰はガクガクと震え
息は切れ、頭の中は霞がかかったようにボーッとしている。
やっと終わった・・・
だけど中出しされたという絶望感が私の心を傷つける。
ハア・・・
ハア・・・
ビクッ
「ハア・・・ハア・・・う・・・うううう・・・」
「おい！次ぃ誰が犯る？」
「オレにヤラせてくれ！もう我慢できねーよ！」
「ああ!?待てよ！オレもまだヤッてねーんだぞ！」
私へのレイプはまだ続く
耐えなきゃ・・・耐えなきゃ・・・・・・
ビク
トロ・・・
ポタ
ポタ

休む間もなく次の男が私を犯そうとベッドに上がる。
『まさか海の家の女店長がラブホで複数の男に犯されてるなんて海水浴客も思ってねーだろうな！』
『それとも店の客ともセックスしてたりするのかなぁ？千鶴ちゃんは清純そうに見えて淫乱だからなぁ♪』
ハァ…
ハァ…
ハァ…
「っ!?…そんなこと…するわけないわ…！」
男たちは私の恥辱心と屈辱感を煽るために酷い言葉を吐き捨てる。

私のアソコにペニスを入れられる。
『んんっ！……はあ……』
何度もイカされ膣内が焼けるように熱い。
それに全身が性感帯になったかのように敏感になっている。
このままだと私の体は壊れてしまうかもしれない。
ハァ…
ハァ
ん…
ハァ…
ズプ…

『あんっ!!・・・あんっ・・・あっ!あぁっ・・・!』
激しく子宮を突かれ、鈍い痛みと快感が交互に押し寄せる。
『ハアっ・・・ハアっっ・・・い・・・痛い・・・あああっ・・・!!』
痛がる私に対し男たちはただ笑いながら見下ろしている。
私のことなんてただの玩具としか思っていない。
ハア
痛・・・い・・・
あぁ!!
ハア
あ。
ゲチュッ
ぬぷっ!
パン
パン
パン
ハア
あぁっ!!
生あっ!
「オラ!もっと気持ち良さそうにヨガれよ!肉便器!」
「お前はレイプされて悦ぶマゾ女だろうが!」
「ああっ・・・あっ・・・ちが・・・はっ・・・はあっ・・・あっ・・・!!」

終わらない苦痛。男はまだ私を突き続ける。
「なあ！いっそのこと店のメニューに『相沢千鶴とセックス』って書いとけよ！そしたら店も大繁盛間違いなしだぜ！はははっ！」
「そりゃ良いな！千鶴ちゃんもみんなの肉便器にされて嬉しいだろ？」
「くっっっ……んっ……あっ……ああっ」
酷い…
男たちは私の体と心を執拗に責めて楽しんでいる。

「乳首こんなに立たせやがって・・・本当は犯されて興奮してんだろ？」
「きゃあっ!!痛いっ・・・やめ・・・あああぁ・・・・」
乳首を思いっきり抓り上げられ激痛が走る。
「ははは！このマゾ女が！」
「いやああっ!!ああっ・・・あっ・・・ああんっ・・・!!」
あっ!!あっ!!
ぎゅっ
あんあんっ！
ぐちゃっ
ちゅぷっ
パン
パン
あん・・・
あっ！

「ああんっ・・・!!ああっ・・・!!あ・・・んっ・・・!!」
「おら！中に出すぞ！」
ドプ・・っっっ!!
勢いよく出された精子は私の子宮を刺激し
痺れるような快感をもたらす。
ああ!!
ドプッ!!
ドクッ
ドクッ
ビクンッ
ビクン
「あああぁっ!!・・・・あっ・・・あ・・・っっっ!!」
体は激しく痙攣しながら仰け反り
そして絶頂を迎えた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・・」
激しい絶頂の末、私の体と心はかなり消耗し
乳首と子宮はいまだにズキズキと痛い。
こんなに何度も中出しされて妊娠しちゃったらどうしよう・・・
ハア
ハア・・・
ハア
ガロ・・・
ポタ・・・
ボタ・・・
「ははははっ!!痛い痛いって言っておきながら
結局イッってんじゃねーかよ!」
「まったく、どうしようもねーマゾ肉便器だな!」
「う・・・うう・・・酷・・・い・・・・」
追い打ちをかけるように罵倒されぐっと涙を飲んだ。

「やっとオレの番まで回ってきたぜ！」
私は足を持ち上げられ男の目の前でアソコを露わにする。
そして、あろうことか男は私のお尻の穴を指で撫でたり
広げたりして弄んでいる。
「んっ・・・ハア・・ハア・・・・ちょっ・・・何を・・・・」
ハア
ハア・・・
ハア
トロ・・
「一回こっちの穴も犯してみたかったんだよな！」
「え・・そんな・・・恐い・・・・・・やめて・・」
緊張と恐怖で動悸が激しくなる。
そっちの穴は初めてなのに・・・

メリッ!!ズブッ・・・ズッ・・・
男のペニスは強引に私のお尻の穴を
抉じ開け挿入させられる。
「きゃあああぁっ!!」
想像以上の激痛・・・
あまりの痛さに見悶え悲鳴を上げる
ことしか出来ない。
じゃあ!!
痛っ・・・
痛!!
ビクッ
ビクッ
ズプ・・
ズズ・・・
「い・・・痛いっ・・・お願い・・・抜い・・・て・・・」
「おい!動くな!」
嫌・・・もしこの状態で腰を動かされたら・・・

『おい！こいつの腕を抑えてろ！』
「いやあっ!!やめて！離して!!」
「おとなしくしろコラァ!!」
腕を押さえつけられ身動きの取れない私を
男は容赦なく犯す。
『ああっ!!・・・あっ！・・・痛っ・・・きゃあっ!!』
激しい摩擦に耐えきれずお尻の穴が裂けて出血し
更に痛みが増す。
「ははっ！どうだ！アナルファックは初めてか？
オラ！オラ！」
ブチュッ

『あぁっ!!・・・イヤぁ・・・助け・・て・・・・」
痛みから逃れようと必死に身を捩ろうとしても
腕をガッチリと掴まれていて動けない。
「おいおい！マンコがヒクヒクして寂しそうじゃねーか！」
「ローターでも突っ込んどけ！」
・・・っ!?
くっ?あっ!!
ぐ!・・・
ぬぷっ!
ぶちっ
「いやああ!!ああっ!!ああん!!はあっ!!はぁっ!!」
膣の奥で激しく振動するローターの刺激と
お尻の穴の激痛が合わさり物凄く苦しい。

『あんっ!!あっ!!あっ!はぁっ!あっ・・・!!』
2つの穴を抉る激痛と快感・・・
それはもはや拷問に近かった。
「おお・・・出すぞ出すぞ!」
「はあっ!はあっ!いやああっ!!」
ああ・・・!!
ビクッ
プシャ・・・
ヴー・・・
ビクン
ドプッ
「ふんっ!!」
『ああぁあっっっ・・・・!!』
男が射精した直後に私も絶頂を迎えた。

『はあ・・・はあ・・・はあ・・・あ・・・あぁ・・・」
ペニスを抜いた後も肛門は血を滴らせながら大きく広がり
冷えた空気がお腹の中へと入ってくる。腸内に出された精液が気持ち悪い。
ああ・・・ようやくこの苦痛から解放された。
「ははははは!!肉便器らしい無様な姿だぜ!尻穴から精子垂れ流しやがって!」
朦朧とした意識の中で男たちの声だけが聞こえる。
ハァ
ハァ!
ハァ
ビクッ
ビクッ
ゴロ・・・
『もう4人とも犯ったな?」
「おう!」
「こんなイイ女を肉便器にできるなんて役得だぜ!」
やっと、この地獄のような夜が終わる
私・・・もう家に帰れるの?

ガチャ・・・
不意に部屋のドアが開かれる。
「ちわ〜っす！」
「!?」
「お！来た来た！」「遅かったじゃねーか！」
部屋に入ってきたのは数人の男たち。
「わお！その女っすか！」「もう全裸じゃん！」「すっげカワイイ！」
私は男たちに囲まれる。
・・・そんな、どうして・・・
「桐島さん！本当にこの女、犯っちゃってイイんスか？」
「ああ！メチャクチャにしてやれ！」
「やりぃ!!」「よっしゃあ!!たっぷり可愛がってやるぜ！」
「!?い・・・いやっ!!そんな話、聞いてないわ!!」
「そりゃそうだ、言ってねーもん♪」
「っっっ!?」
この男・・・どうしてこんな酷いことを平気でできるの!?
「おい！こいつの手と足を抑えてろ！」
「いやああっ!!お願い！こんなこと・・・もうやめて！」
必死に手足をバタつかせる。これ以上犯されると私は・・・
「大人しくしろ!!」パシィイン!!「きゃあっ!!」
平手で頬を思いっきり殴られた。
「千鶴ちゃんの家族がどうなってもいいのかな？確か可愛い妹がいたよねぇ？」
「!?くっ・・・ぅう・・・ぅう・・・・・私のことは好きにしていい・・・
だから・・・家族には手を出さないで・・・!!」
私は泣きながら懇願した。
「ふふふ・・・良い子だ♪」

ハア ハア！
ハア！
「はあ…はあ…はあ…はあ…」
手足を拘束され身動きが取れない。
大勢の男たちが裸の私を見下ろして笑っている。
「うわ～すげー…マジで女にこんなことやれるんだ…
マジで肉便器なんじゃんこいつ！」
「だろ？今からこいつに何やってもいいんだぜ？」
「やった！こんなのAVだけだと思ってたぜ！」
嫌…恐い…
今からどんな酷いことをされるの？
でも今の私に抵抗する気力も体力も残っていない。
何度も犯されて心も体もズタボロになっているから。
それに、もし私が抵抗するとその時は…
ここに私の味方は誰もいない。誰も助けてくれない。
男たちが飽きるまでレイプされ苦痛を与え続けられるだけ。
絶望しかない。

さっきの男たちが一斉に私に襲いかかる。
胸を揉みくちゃにされ体を舐め回され
アソコにバイブをねじ込まれる。
「あ…ん…ああっ…あんっ…あっ!!」
「うわっ…この女、体中汗でビッショリじゃねーか!」
「桐島さんたちに、ずいぶん可愛がってもらったみてーだな!」
「女を犯すの初めてだから興奮するぜ!」

体中を複数の手で嬲られ、敏感な体は
別の生き物のようにビクビクと反応する。
「ああんっ!!…あっ…痛いっ…痛い!…あっ」
バイブを激しく強く出し入れされ凄く痛い。
「おい!手を止めるなよ?この女は性奴隷だから何やってもいいんだよ!」
「ははっ!!分かってますよ!」
「そんな…!?…ああっ!!あんっ!!あんっ!!いや…あ…」

バイブを動かす手が更に早くなり私の膣内をかき回す。
「はあっ・・・はあっ・・・はっ・・・あっ・・・あっ!!あっ!!ああっ!!」
「ははっ・・・気持ち良いか?イケ!イケ!」
「ヤッベ・・・すげーエロい喘ぎ声」
「あんっ!!あんっ!!ああっ!!あああああ!!・・・・っっっ!!」
腰はガクガクと痙攣し尿道から勢いよく潮が吹きだす。
強制的にイカされるなんて、ただ苦痛でしかない。

「ハア…ハア…あ…ああ…」
腰はガクガクと震え膣内は擦り切れて痛い。
そして敏感になった体は汗が伝うだけでビクッと反応してしまう。

「ん・・・うう・・・う・・・・・」
チョロチョロチョロ・・・
度重なる膣内への刺激のため尿道が緩み
イッた直後の脱力しきった体は耐えることすらできずに
オシッコを漏らしてしまう。
「うわっ！この女、小便漏らしやがった！」
「はははは っ!!肉便器のクセに小便漏らしてんじゃねーよ！」
「その歳でお漏らしだなんて恥ずかしいね～♪」
「千鶴ちゃんの恥ずかしい小便シーンもちゃんと撮影してるからな！」
「グスッ・・・いやぁ・・・やめて・・・見ないで・・・・うう・・・う・・・・・」
あまりにも情けなくて、惨めで、悔しくて・・・
両目から大粒の涙が溢れて来た。
んっ・・・
う！
!?
ビクッ
ビク
チョロ
チョロ

「あーあ、ベッドの上で小便漏らしちゃって・・・
おかげでシーツがビショビショじゃないか・・・」
桐島 幸輔・・・
「小便だけじゃない・・・千鶴ちゃんの汗、涙、涎、マン汁、
そして血・・・シーツ全体が千鶴ちゃんの体液で塗れている。」
「くっ・・・うう・・・」
私を見下ろす目は侮蔑と嘲笑に満ちている。
それはサディストそのものの目・・・
私の体にゾクゾクと悪寒が走った。
ハァ・・・
ハァ
ハァ・・・
ゼクッ
じわ・・・
ゼクンッ
「こんな躾のなってない肉便器にはお仕置きが必要だね♪」
「そっ、そんな・・・!?それはあなたたちが・・・・・きゃあっ!?」
私の手足を拘束していた手枷と足枷が外され
その瞬間、髪を掴まれ強引にベッドから引きずり降ろされた。
ああ・・・これからもっと酷いことをされる・・・

男たちは今まで以上に乱暴に、そして暴力的に私をレイプする。
髪を掴まれ、踏みつけられ、ビンタも何発かくらった。
体を痛めつけられながらのレイプは想像を絶する苦痛を生み出す。
「ははは っ!!こんな目に合ってんのにマンコ濡らしやがって!このマゾ女が!」
「うぷっ・・・んむぅ・・・おぶ・・・んうう・・・」
一人の男が下から私のアソコを太いペニスで突き上げながら罵倒する。

「オラァ!!ちゃんとチンポ握れよ!!」
バシィィン!!激昂した男が私の頭を強く叩く。
「んんっ!?・・・ふぶっ!!んむっ・・・んっ・・・!!」
「ほらほら!全員を満足させなきゃ、いつまでたっても終わらないよ♪」
「んむぉおっ!?んんんっ・・・おぶっ・・・うぷっ・・・」
今度は乳首を思いっきりつねられ、口にペニスを咥えたまま悲鳴を上げた。

「オラ！休まずちゃんとしゃぶれ！」
「ぶふっ!!うぶっ…むおっ…んうううっ!!」
まるで口の中を犯すように動かされるペニスは喉の奥まで届いてとても苦しい。
「ははっ!!普通のフェラより断然イイぜ！」
「んぷっ!!おぶっ…んおっ…お…!!」
ペニスを咥えながら何度も嘔吐いてしまう。
おぶっ!!
ぶふっ!!
ちゅぷっ
んんっ!!
んぐっ!!
ぬぷっ

「うおお!!もうそろそろ出そうだ!」
「んんっ!?うぷっ!!んむっ…んっ!!…んっ!!」
私のアソコを突きあげていたペニスが更に激しく、早く動き出す。
そして私の膣内に更なる痛みと快感をもたらした。
「うむぅっ!!んっ!!おふっ!!おっ…んっ!んおっ!んんっ!!」
んっ!!
んんっ!!
ビクッ
ぢゅぷっ
ちゅっ
ギュッ!!グリグリ…
「んんっ!!んぁっ!!んおっ!!ぶふぉっ…んおぉっ…!!」
乳首を更に強くつねり潰され、体に電流が走ったようにビクビクと反応する。
そして…
ドプッッッッ!!
「んんんっっっっ……!!」
膣内に射精されたのとほぼ同時に私はイッてしまった。
ビクン
うむぅ!!
ドプッ!!

「オレも出すぞ！」
ドプッッッ!!ビュクッ!!・・・ドクッ・・・
「んぷっ!!・・・えうぅ。。んんんっっっ・・・!!」
「全部飲め！もし零したらもっと酷い目に合わせるぞ！」
つぶっ!!
ドプッ!!
「んんっ・・・んくっ・・・んくっ・・・んふっ!!えふっ!!」
しょっぱくて苦い精液がネトネトと舌や喉に絡みつく。
必死に飲み込もうとしたけど、やっぱりどうしても咽てしまう。
ボタ・・・
ボタ・・・
ビクッ
ビクッ
ゴクッ・・・

「うえええぇっ!!ケホッケホッ・・・ケホッ!!・・・
おえぇっ・・・ハアッ・・・ハアッ・・・ハアッ・・・ハアッ・・・」
「なに溢してんだ!!全部飲めっつったろ!!」
パチイイイン!!
「きゃあっ!!」
男は怒号を飛ばしながら私の頬を平手で殴る。
「くっ・・・うっ・・・あ・・・うう・・・」
「泣けばやめてもらえると思ったら大間違いだぞ!!」
「早くしろ!!後がつかえてんだよ!!」
「オレもまだ犯し足んねーぞ!!」
「い・・・いや・・・もうやめて・・・・誰か助けて・・・・・・・・」
ハアッ!!
ビクッ
ドピュ
ポタ・・・
ポタ・・・
ビクン
ハア!!
ハアーッ
ハアッ

その後も私は男たちに何度も何度もレイプされる。
激しい罵倒を浴びせられ、お腹を思いっきり殴られ、口とアソコと肛門・・・
使える穴は全て使って男たちの性欲処理をさせられた。
いつ終わるかも分からない私への暴力と凌辱は
私の心と体を確実に蹂躙し壊していく。
一体・・・いつまで続くの・・・・・・?

・・・どれくらいの時間が経ったのだろう・・・
男たちが満足するまで何度もレイプされ続けた。
何回犯されたのか覚えていない。
途中で一度、気を失ったりもした。
体中が痛い・・・
大量の精液を飲まされたせいか、お腹の中が
気持ち悪くて吐きそう。
おまけに意識は朦朧とし、視界は霧がかかったように
白くボヤけている。
もう私の体は限度を超えて疲弊しきっていた。

「ハア・・・・・・ハア・・・・・・ハア・・・・・・」
「はっはっはっは！無様な姿だね！一人だけ裸にされて
全身ズタボロで精子まみれになってさぁ・・・」
男たちは追い打ちをかけるように言葉を吐き捨てる。
「こんな姿を千鶴ちゃんの家族や友達に見せたら
どう思うだろうねぇ？」
「それか、この動画を千鶴ちゃんの住所と一緒に
ネットで晒しても良いんだぜ？」
「ハア・・・ハア・・・ハア・・・い・・・いや・・・・
それだけは・・・・やめ・・て・・・」
「だったらどうすればいいか分かってるよな？」
「お前がどんなに強くてもオレたちの前では
只の肉便器なんだからな！」
「くっ・・・うう・・・」
「それじゃあ、また今度もヨロシクね♪」
「ううっ・・・うっ・・・ぐすっ・・うぇっ・・・ううう・・・」
あまりにも酷い・・・こんな仕打ち・・・
しばらく私は嗚咽を漏らした。
120min
REC
HQ 720/60P

「エビチャーハンとミートスパゲッティおまちどお様！」
今日も私はいつも通りお店で料理を作っている。
だけど・・・
昨日の凄惨なレイプの傷痕は私の体と心に深く刻まれている。
一夜明けた今でも体中の痛みと疲労感は消えない。
体中の痣は皆に心配されたけどなんとか誤魔化せた。

『辛い・・・苦しい・・・本当は誰かに縋りつきたい・・・』
私は壊れそうな心を笑顔で必死に隠す。
誰にも悟られないように。
誰にも心配をかけさせないように。
男たちの気が済むまで私が耐えるしかない。

しかし

男たちの行為は

更にエスカレートする・・・